

漢詩神奈川

第 35 号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301

TEL-FAX
045-573-3045

発行人 香取和之
編集人 久川憲四郎

十月二十六日神奈川大会に参加を！

神奈川県漢詩連盟会長 香取和之

皆様ご承知の通り、令和六年度全日本漢詩

大会神奈川大会が本年十月二十六日(土)にJR桜木町駅近くの「はまぎんホール ヴィアマール」で開催されます。大会の内容は、本会報の二・三頁に記載されていますが、文部科学大臣賞を始めとする特別賞の表彰式、受賞詩の吟詠、全日本漢詩連盟会長鷺野正明先生による漢詩講演「蘇州の歴史と漢詩」、構成吟「神奈川を詠う」など盛り沢山です。身近な所で全日本漢詩大会が開かれるのは稀であり、是非出席下さい。また同夜は中華街での懇親交流会、翌



香取和之会長

二十七日には三溪園散策もありです。これらについても積極的に参加して、楽しんで頂くよう希望します。

本年の前半の大きな行事といえ、四・五月の漢詩入門講座と五月三十日の総会が挙げられます。漢詩入門講座は二〇〇六年の神漢連創立以来毎年開催しており今年は十八期です。受講生は四十名でスタートし、二十八名の方が五回の講習を受けて七言絶句一首を作り出して卒業しました。十八期有志で漢詩サークルを作り、漢詩の研鑽に励みますので、漢詩の仲間として温かく見守り願います。総会での漢詩講演会は、鷺野正明先生の興味深いテーマ「花はいつ開くー漢詩と暦ー」であり、会員以外の一般の方々も含め多くの漢詩愛好家が熱心に聴講しました。本会報六七頁に講演内容が記載されていますので、聴講されなかった方は一読下さい。

漢詩鑑賞会Aでは、ご高齢の玉井先生が長年の神漢連HP冒頭の漢詩解説を春夏秋冬にまとめられて、四月からZOOMで講義を始められています。先生の「解説」が素晴らしく、

詩の核心を突く指摘や隠された詩の本意など、市販の詩集では味わえない内容です。尚、本会報十頁には鑑賞会Aの連絡先が記載されており、今からでも申し込み可能です。

ところで今年の大河ドラマ「光る君へ」をご覧になっている方も多いと思いますが、TVドラマでこれだけ漢詩が取り上げられたのは初めてと思います。例えば第十回では、道長がまひろ(紫式部)への恋心を古今和歌集の歌に託して送ると、まひろは陶淵明の「歸去來辭」の冒頭の一節を用いて道長の「志」の在り方を説いています。

歸去來兮、田園將蕪胡不歸。

既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲。

悟已往之不諫、知來者之可追。

實迷途其未遠、覺今是而昨非。

今後ドラマの所要所で漢詩が用いられると思われ目が離せません。

これらのことを記すと、漢詩学習は順調に進められると錯覚を起こしかねませんが、我々は奥深い漢詩のほんの入り口に立っているだけであり、お互い高みを目指して自分なりの工夫をして研鑽を積みたいものです。

その為には正しい学習方法が必須であり、窪寺啓先生の作詩に関するご講話を纏めた「都漢詩連盟会報五十一号別冊」を、本会報に同封して皆様にお届けします。熟読玩味願います。尚本件は、東京都漢詩連盟池上一利会長のご厚意によるものです。

全日本漢詩大会神奈川大会の概要

事務局長 久川憲四郎

全日本漢詩大会神奈川大会は、十月二十六日開催に向けて、順調に諸準備を取り進めているところです。

大会の概要と準備の進捗状況について、以下記載いたします。

大会の概要

漢詩大会の開催日時と場所

令和六年十月二十六日(土)

午後一時三十分～四時三十分

はまぎんホール ヴィアマール

(JR桜木町駅前)

応募作品審査の結果 入賞・入選者には八月初を目途に連絡する。

表彰・賞

(特別賞) 文部科学大臣賞、神奈川県知事賞、横浜市長賞ほか計十三賞

(秀作)(入選)(U23奨励賞)(U18奨励賞)

発表と漢詩大会

表彰式・特別賞・入賞・入選作発表、表彰、選評等

記念講演…全日本漢詩連盟鷺野正明会長の

講演「蘇州の歴史と漢詩」

特別賞受賞作品の吟詠

構成吟「神奈川を詠う」

交流懇親会

同日午後五時三十分～七時三十分

横浜中華街

吟行会

翌二十七日(日)午前十時三十分～午後二時三十分 「三溪園」(国指定名勝)

準備状況

応募作品は五月末締切り済、現在選者により審査が行われています。

受賞作の吟詠については、神漢連の詩吟愛好者によって吟詠する予定。

構成吟については、神奈川県を詠った詩として、絶句七首と律詩一首を選定して、岳

精流日本吟院の皆さんが吟詠する予定(詳細は、二頁をご覧ください)。

昨年の大会参加者の感想

昨年、全国漢詩の祭典に参加した三浦哲郎氏より、参加の感想を書いてもらいました。会員の皆さん、当日は会場にお越しください。

いしかわ百万石文化祭「全国漢詩の祭典」に出席して 三浦哲郎

昨年十月、石川県小松市で開催された全国漢詩の祭典に出席した。全国大会で初めて入選したので、嬉しくて朝東京駅から北陸新幹線で金沢乗り換え、正午に会場の小松市団十郎劇場に着いた。小松市は江戸時代に加賀の支藩で、漢詩、歌舞伎、俳句が盛んな街で、現

在でもその伝統は続いている。産業では九谷焼工房や建機メーカー小松製作所の本社工場がある。

当日は、来賓挨拶後表彰式が行われ、神漢連からは三村前会長、高橋純子氏を始め九名が表彰された。又、香取会長が次開催地神奈川を代表して歓迎の辞を述べた。

その後、記念講演(金沢学院大学柳澤名誉教授「明治期の知識人(西田幾多郎・高峰讓吉)に見る漢詩文教育の重要性」)、石川県詩吟連盟による特別賞作品の吟詠と構成吟(加賀藩の木下順庵、大窪詩佛等の漢詩を題材にした舞と吟の合作)が披露され満場の喝采を浴びた。

閉会後は懇親会に移動、加賀・能登の銘酒や名菓を堪能して懇親を深めた。

翌日は貸し切りバスに四十名で金沢市内へ吟行会を行い、県立美術館、成巽閣、兼六園を見学、昼食後、明治期の金沢の漢詩人北方心泉の常福寺を見学、全員で記念撮影をして十四時に金沢駅前解散した。

初めての大会参加だったが、石川漢詩連盟の皆様の厚いおもてなしと久しぶりの兼六園の楽しい旅だった。特に小松市では、大会当日の夜の宿泊所を予約していなかったが、金沢マラソンのためホテルは満室で、やっと幹事のご尽力で民宿ホテルが取れ、四人部屋二段ベッドで、パリから来たフランス人の若いカップルと相部屋となったのも良い思い出となった。

神奈川大会
漢詩講演・構成吟・吟行会の案内

漢詩講演会

漢詩講演は、全日本漢詩連盟会長の鷺野正明先生による「蘇州の歴史と漢詩」が行われます。蘇州は、古くは春秋時代の呉の都でした。鷺野先生が蘇州と漢詩について、どのようなお話をされるか、皆さん、お楽しみに会場にお越しください。

構成吟「神奈川を詠う」

神奈川県を詠った詩として、絶句七首と律詩一首の計八首を選出した。

箱根… 函山雑詠 夏目漱石
湘南の風物… 箱根駅伝、酒匂川、江の島
湘南海岸見箱根駅伝与滑瀾

岡崎満義(神漢連会員、元会長)

酒匂川畔村酒 城田六郎(元神漢連会員)
江の島… 絵島 菅茶山

鎌倉 頼朝故宮 太宰春台
鶴陵廟偶成 秋吉邦雄(元神漢連会員)

葉山… 葉山海岸望岳 鈴木豹軒
横浜… 横浜 嵩古香

函山雑詠 八首其二 夏目漱石

函嶺勢崢嶸 函嶺勢崢嶸たり

登来廿里程 登り来たる廿里の程

雲従鞋底湧 雲は鞋底より湧き

路自帽頭生 路は帽頭より生ず

孤駅空辺起 孤駅空辺に起こり

廢関天際横 廢関天際に横たはる

停筇時一顧 筇を停めて 時に一顧すれば

蒼靄隔田城 蒼靄田城を隔つ

湘南海岸見箱根駅伝与滑瀾 岡崎満義

雪峰映海此迎新 雪峰海に映じ此に新を迎える

走路人兼滑瀾人 路を走る人と瀾を滑る人と

世上躁狂都似夢 世上の躁狂都て夢の似し

乘風奔放楽青春 風に乗り奔放青春を楽しまん

酒匂川畔村酒 城田六郎

嶽麓發源清冽川 嶽麓に源を發す清冽の川

麴塵粳稻僻村傳 麴塵粳稻僻村に伝う

綠醅初熟醍醐味 綠醅初めて熟し醍醐の味

一斗十千何惜錢 一斗十千何ぞ錢を惜しまんや

繪島 菅茶山

山陽諸島列成隣 山陽の諸島列して隣を成す

佳境各堪誇北人 佳境各おの北人に誇るに堪えたり

一事唯難及斯地 一事唯だ斯の地に及び難し

芙蓉隔海露全身 芙蓉海を隔てて全身を露わす

頼朝故宮 太宰春台

独騎鷹揚定大東 独騎鷹揚として大東を定む

千秋霸業壯関中 千秋の霸業関中に壮たり

繁華銷尽青山下 繁華銷え尽す青山の下

禾黍離離戰晚風 禾黍離々として晚風に戦ぐ

鶴陵廟偶成 秋吉邦雄

亭亭朱廟屹青天 亭亭たる朱廟 青天に屹ち

鬱鬱綠雲纍紫烟 鬱々たる緑雲 紫烟を纍う

磴上偏憐小靈樹 磴上偏えに憐れむ小靈樹

藥栽期得又千年 藥栽期し得たり 又た千年

葉山海岸望岳 鈴木豹軒

雪岳半肩蒼靄間 雪岳半肩 蒼靄の間

海天如拭碧波間 海天拭ふが如く碧波間なり

秀容千古終無改 秀容千古終に改まる無し

真是乾坤第一山 真是是れ乾坤第一の山

横浜 嵩古香

隔海孤洲別作郷 海を隔つる孤洲別に郷と作る

滿街奇貨各豪商 街に満つる奇貨各おの豪商

誰知繡戸瓊樓地 誰か知らん繡戸瓊樓の地

旧是漁郎晒網場 旧と是れ漁郎の網を晒らす場なるを

吟行会

大会翌二十七日(日)「三溪園」において吟

行会を開催します。交通手段については参加

者にお知らせしますが、三溪園を散策、昼食

の後、園内の旧燈明寺本堂(室町時代建築を

移築)において、関東学院大学鄧捷教授によ

る漢詩講義を行います。

十八期漢詩入門講座開催

―多くの仲間が神漢連に入会―

第十八回を迎え、定員四十名を超える応募を頂き四、五月五回で開催。漸くコロナ明けから解き放たれた漢詩愛好家が、東京都など近県を含め熱心に参加されました。伝統の寺子屋方式で、六グループに別れベテラン会員が講師となり総出で協力の下、中身の濃い意見交換となり、最終的に二十八首の卒業詩が完成。連盟にも二十名を超える新加入者をお迎えすることが出来ました。本年の特徴は(1)初めて女性が男性より多かった、(2)平均は七十歳代だが、練達者で「基礎から再学習したい」方が目立ったこと、(3)「鑑賞だけでも」と考えたが「作詩の楽しさが分かった」との反応が寄せられた等が挙げられます。秋までには新漢詩サークルとして発足の予定で、已に役員も決定し、スムーズに例会に入れる状況が出来上がっています。

今後随時、各鑑賞会、霧笛会等への参加も見込まれ、サークル横断的な交流も大いに期



寺子屋で、漢詩創作に励む

待する所です。

(新井治仁)

なお、十八期の代表世話人は佐野輝美氏、講師は松井秀人氏、木村孝氏です。

最優秀賞

花時出遊

花時出遊

奈良千鶴子

花香郁郁世專春

花香郁々として世は専ら春

再味青陽喜壽人

再び青陽を味わう喜寿の人

歴亂櫻桃閑忘步

歴乱たる桜桃に閑し歩を忘れ

清明時節欲還巡

清明の時節還た巡るを欲す

優秀賞

花時出遊

花時出遊

佐藤一夫

江山十里雨晴時

江山十里雨晴るる時

一路長堤千萬枝

一路長堤 千万の枝

明媚櫻花楊柳綠

明媚櫻花楊柳緑なり

流鶯美景好題詩

流鶯美景好し詩を題せん

送春

春を送る

佐野輝美

綠陰寂寂老鶯鳴

綠陰寂々 老鶯鳴き

新樹幽庭芳草萌

新樹幽庭 芳草萌ゆ

酒醒殘紅留不得

酒醒めて 残紅留め得ず

南風一夢惜春情

南風一夢 春情を惜しむ

醉江樓

江樓に酔う

谷嶋美知子

朧月光陰春色浮

朧月光陰 春色浮び

酣歌吹笛醉江樓

酣歌吹笛 江樓に酔う

故山十里微風度

故山十里 微風度り

歡喜高吟不說愁

歡喜高吟 愁を説かず



勢ぞろいした十八期生たち

漢詩入門講座に参加して

佐野輝美

六五歳になり、趣味の時間を増やしたいと思ひ、シテイガイドとなるべく研修を受けています。その際に神社・仏閣にて漢詩に触れる機会がありました。そこから漢詩を学びたいとネット検索したところ今回の漢詩入門講座と出会うことが出来ました。高校時代以来の漢詩の学習となりました。「平仄」、「韻を踏む」という言葉を聞くだけで腰が引けてきます。

しかし、本講座の講師陣の指導法がすばらしくて、回を重ねるごとに漢詩が身近なものになり、読みたい気持ちとなつていきました。

更に、驚いたことに漢詩を作りたひ気持ち湧いてまいりました。特に寺子屋方式は親しみやすく、共に学んでいる方との仲間意識が深まりました。最終回に二十八名もの卒業詩に出会えたことはよい思い出となりました。

今後も漢詩を楽しんでまいります。

連盟の行事

令和六年度第十九回定期総会が開催

事務局長 久川憲四郎

令和六年度第十九回定期総会は五月三日、神奈川近代文学館ホールにおいて、来賓に鷲野正明全日本漢詩連盟会長、池上一利東京都漢詩連盟会長を迎え、会員約九十名が出席して開催された。

水城まゆみ副会長が開会を宣し、香取和之会長の「十月の全日本漢詩大会神奈川大会を成功させよう」との挨拶が行われた。

続いて、事務局長および会計担当者より、令和五年度の事業報告、決算報告が行われた後、六年度の活動計画と予算案、人事案がそれぞれ承認された。最後に新井治仁副会長が閉会の言葉で、盛会裏に終了した。

総会後の漢詩講演会では、来賓の鷲野正明先生が「花はいつ開くー漢詩と暦ー」と題する講演を行った。会員以外の参加者も含め、約百四十名の聴講者があり、季節と暦に関する新しい知識に興味を持って聴き入っていた。講演内容は、要旨を本会報の六頁・七頁で紹介しているほか、YouTubeに収めて公表している。

なお、総会に先立ち、故桜庭慎吾氏蔵書の頒布会が行われ、たくさんの会員が来場し、約三百五十冊が頒布された。

令和五年度決算・六年度予算

令和5年度一般会計決算			令和6年度一般会計予算			令和5年度田原基金決算			令和6年度田原基金予算				
区分	費目	金額	区分	費目	金額	区分	費目	金額	区分	費目	金額		
収入	前年度繰越	599,920	収入	前年度繰越	528,887	収入	前年度繰越	902,045	収入	前年度繰越	941,387		
	年会費等	873,500		年会費等	899,000		叢書頒布	36,900		叢書頒布	30,000		
	行事参加費	129,500		行事参加費	162,000		その他収入	6,000		その他収入	1,000		
	その他	35,500		その他	31,000		収入計	944,945		収入計	972,387		
	収入計	1,638,420		収入計	1,620,887		支出	558		支出	20,000		
支出	庶務費	380,907	支出	庶務費	560,000	支出	その他雑費	3,000	支出	その他雑費	25,000		
	広報事業費	175,703		広報事業費	240,000		支出計	3,558		支出計	45,000		
	教育事業費	276,273		教育事業費	225,000		残	次年度繰越		941,387	残	次年度繰越	927,387
	全漢連費	238,570		全漢連費	270,000	令和5年度末神奈川県漢詩連盟資金残高							
	その他	38,080		その他	120,887							一般会計	528,887 円
	支出計	1,109,533		支出計	1,415,887							田原基金	941,387 円
残	次年度繰越	528,887	残	次年度繰越	205,000	合計	1,470,274 円						

(単位：円)

令和六年度人事

☆理事

古田光子 岡田泰男 横山真吾 室橋幸子
中島龍一 飯島敏雄 高津有二

☆執行理事

香取和之(会長) 水城まゆみ(副会長)

新井治仁(副会長) 久川憲四郎(事務局長)

東島正樹(事務局次長) 瀧川智志

山口幸雄 蔦 清昭 柴本信子 白石信隆

五嶋美代子 高橋純子 牛山知彦

高田宗治

☆監事

松井秀人 鈴木正敏

☆特別相談役

岡崎満義 三村公二

☆相談役

住田笛雄

☆顧問

窪寺 啓 淺岡清明 池上一利

☆運営委員

家吉幸二 岩波弘道 田川行雄
橋本孝一 中村講二

☆運営委員退任

内山早奈江 田内 隆
大森冽子(新) 吉池 純(新)

☆特別会員

木村 孝(新) 松田奈月(新)
久保裕章(新) 伊藤邦彦(新)

(参考)

市川桃子 高芝麻子
後藤淳一 菅原 武

☆竹林舎

鄧 捷(新) 玉井幸久 飯沼一之 古田光子
住田笛雄 三村公二
水城まゆみ 中島龍一
高津有二

『花はいつ開くー漢詩と暦ー』

ー鷺野正明先生講演会ー

令和六年五月三十日(木)神奈川近代文学館に於いて、全日本漢詩連盟会長の鷺野正明先生による『花はいつ開くー漢詩と暦ー』の講演会が開催され、約百四十名の来場者で大変盛会でした。



【一 暦は、過去と未来の時を刻む】

私たちは漢詩を勉強していますけれども、漢詩が作られていた時代も当然暦がありました。その暦によって季節を認識し心を切り替えているのです。特に大晦日から正月になると、時間はひと続きですが正月になると気持ちが変わります。不思議なものです。しかし、暦と現実の季節がずれていることがあり、昔から中国でも詠われております。羅隱の「人日立春」という詩の起句と承句

です。

一二三四五六七 一二三四五六七

萬木生芽是今日 万木芽を生ずるは是れ今日

正月になったが、あらゆる木々が芽を出すのは七日の今日だ。つまり立春の日は一月一日ではなく人日だったという訳です。

【二 暦のはなし】

東洋の暦は中国に発祥し紀元前十一、十二世紀の殷代に干支(十干十二支)が作られました。これを組み合わせていきますと六十でまた初めの年に戻ります。還暦ですね。これを六十干支といいます。中国の歴史書は全てこの六十干支を使い年を表しています。

漢の時代になり太陽暦が生まれます。これは「農暦」ともいわれます。そのとき、気候の変化に従い「二十四節気」が定められました。

二十四節気

- 立春 雨水 啓蟄 春分 清明 穀雨
- 立夏 小満 芒種 夏至 小暑 大暑
- 立秋 処暑 白露 秋分 寒露 霜降
- 立冬 小雪 大雪 冬至 小寒 大寒

この小寒から穀雨の夫々の節を三候に分け、一候に季節の花を配したものが「二十四番花信風」です。花信風とは花だよりの風のこと。風の気配の変化とそれに伴う花の開花

をつぶさに観察したのでしょうか。

二十四番花信風

- 一候 梅花 瑞香 迎春 菜花 桃花 海棠 桐花 牡丹
- 二候 山茶 蘭花 桜桃 杏花 棣棠 梨花 麦花 酴醾
- 三候 水仙 山礬 望春 李花 薔薇 木蘭 柳花 楝花



講演中の鷺野正明先生

【三 花の詩】

それでは花の詩を見ていきましょう。最初は牡丹、李白の「清平調詞 其一」です。開元元年、沈香亭での宴の際、玄宗皇帝が新しい詩をと、二日酔いの李白に命じたところ、たちまち作り李龜年が歌ったという詩です。この詩は牡丹の花を詠うと同時に楊貴妃を詠っています。

雲想衣裳花想容 雲には衣裳を想い 花には容を想う
 春風拂檻露華濃 春風檻を払って露華濃かなり
 若非羣玉山頭見 若し群玉山頭に見るに非ずんば
 會向瑤臺月下逢 会す瑤台月下に向いて逢わん

楊貴妃の衣裳は雲のよう、お顔は牡丹の花のように美しい。春風が沈香亭の手すりを吹き抜けてくると牡丹の露がきらきらと輝きます。このような美人に群玉山で会うのでなければ神仙の世界の瑤台の月の下でしか会うことができないだろうと、言っています。

牡丹は漢方薬として用いられていますが、中唐の頃には観賞用として高値で売買されるようになっていきます。

次は葵花の詩「客中初夏」司馬光です。

四月清和雨乍晴 四月清和 雨乍ち晴れ
 南山當戸轉分明 南山戸に当たって転た分明なり
 更無柳絮因風起 更に柳絮の風に因って起る無く
 惟有葵花向日傾 惟だ葵花の日に向かって傾く有り

清らかで和やかな四月、雨が降りたちまち晴れる。四月は初夏です。我が家の前に南山がくつきりと見える。南山は陶淵明の「悠然見南山」を踏まえていますね。晩春の風物詩の柳絮ももう飛ぶこともない。ただ「葵花」が太陽に向かって咲いているだけだと詠います。この「葵花」は日に向かって傾くとあるので向日葵だと解釈していませんか。これは

「葵」という花です。向日葵は元の時代になりやっと中国に入ってきて来ます。



熱心に聴く多数の来場者

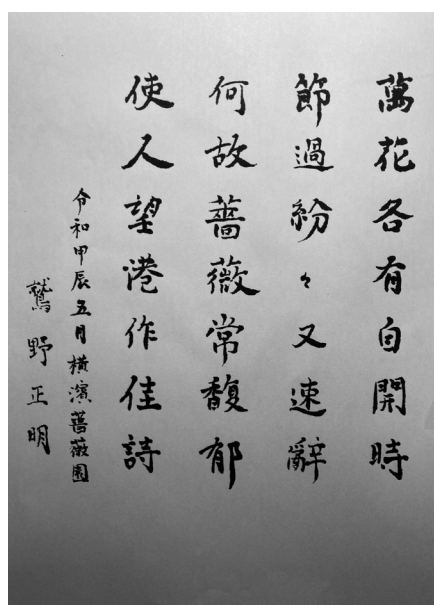
最後は薔薇、高駢の「山亭夏日」です。

綠樹陰濃夏日長 綠樹陰濃やかにして夏日長し
 樓臺倒影入池塘 樓台影を倒しまにして池塘に入る
 水晶簾動微風起 水晶の簾動いて微風起こり
 一架薔薇滿院香 一架の薔薇 滿院香し

緑の樹が茂り影が濃くうつる夏の日、高い建物や池に映る水辺は蒸し暑い。転句で水晶の簾が動いて風に気づきます。すると、たった一つの棚に咲いていた薔薇の香りが庭中に広がり満ち溢れたよと、言っています。どこにも「涼」という字を使わずに、水晶の簾の音の爽やかさと薔薇の香りで涼しくなった様子

を表しています。衣を染めるような香りに包まれる、そんな余韻が残りますね。どうぞ皆さんも帰りの薔薇園で、薔薇の香りを浴びながらお帰りになって下さい。

この講演会にあたり鷺野先生より玉韻を頂戴しました。



令和甲辰五月横濱薔薇園 鷺野正明
 萬花各有自開時 万花各おの自ら開く時有るも
 節過紛紛又速辭 節過くれば紛々として又速かに辞す
 何故薔薇常馥郁 何故に薔薇常に馥郁たる
 使人望港作佳詩 人をして港を望み佳詩を作らしむればなり

この玉韻には今回の講演会のテーマに關した言葉が隠されています。起句の末字「時」と承句の冒頭の字が「節」で「時節」となるそうです。鷺野先生の遊び心が隠されていますね。この講演会はYouTubeがご覧いただけます。是非ご覧下さい。 記 高橋純子

オンライン吟行会

「港」二月二十六日開催

「新旧そろって句を披露して交流を深める」

オンライン吟行会も十回超となり、最近では二月と八月の年二回が定着してきた。今回は二月二十六日に開催された。

応募参加者は三十名で、内容も各自の思いのこもったものとなった。と言うのも、今回の題は「港」で、十月の神奈川大会の「港にかかわるもの」を念頭に置いたものだったからだ。「港」というだけで皆さんそれぞれの受け止め方や感じ方があり、いろいろなイメージが湧くものだと思える。

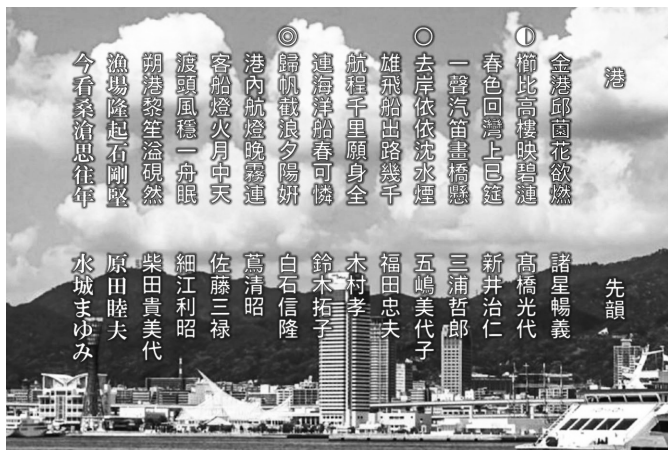
連句講師(香取先生、水城先生)が担当の韻ごとに句を並べていくと、不思議なことに物語が出来上がるように場面が移っていく、と言うので講師も感心するところとなった。

神漢連創設時から最新の期の会員まで、多種多様。その中で十七期からの参加者が優句に選ばれたのは特筆すべきかと思う。

また、前回から講師のコメントに加えて、作者も作句の意図や感想を述べる機会ができて、大変勉強になるやり方になってきた。

これからも年二回、普段会えないような方たちとも交流できる企画として、続けていけたらと思っております。次回は八月二十二日(木)の予定です。多数ご参加ください。

(※)優句(◎)、秀句(○)、皆が投票した結果の人気句(●)です。
(東島正樹)



港

◎ 金港邸園花欲燃
① 櫛比高樓映碧蓮
春色回灣上巳筵
一聲汽笛畫橋懸

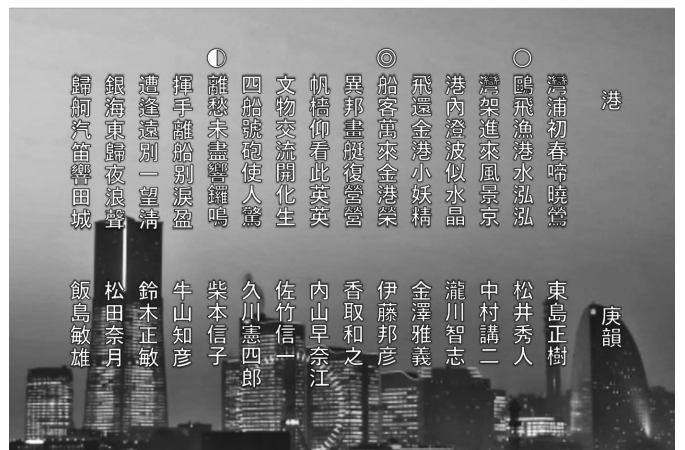
◎ 去岸依依沈水煙
雄飛船出路幾千
航程千里願身全
連海洋船香可憐

◎ 歸帆載浪夕陽妍
港内航燈晚霧連
客船燈火月中天
渡頭風穩一舟眠

◎ 湖港黎笙溢硯然
漁場隆起石剛堅
今看桑渚思佳年

先韻

諸星暢義
高橋光代
新井治仁
三浦哲郎
五嶋美代子
福田忠夫
木村孝
鈴木拓子
白石信隆
葛清昭
佐藤三祿
細江利昭
柴田貴美代
原田睦夫
水城まゆみ



港

◎ 灣浦初春啼曉鶯
鷗飛漁港水泓泓
灣架進來風景京
港内澄波似水晶
飛還金港小妖精

◎ 船客萬來金港榮
異邦畫艇復營營
帆檣仰看此英英
文物交流開化生
四船號砲使人驚

◎ 離愁未盡響鐘鳴
揮手離船別淚盈
遭逢遠別一望清
銀海東歸夜浪聲
歸銅汽笛響田城

庚韻

東島正樹
松井秀人
中村講二
瀧川智志
金澤雅義
伊藤邦彦
香取和之
内山早奈江
佐竹信一
久川憲四郎
柴本信子
牛山知彦
鈴木正敏
松田奈月
飯島敏雄

オンライン吟行会に参加して

いななき会

伊藤邦彦

私はオンライン吟行会が如何なるものか、よく分からないまま参加してしまいました。

そこで参加を考えている方に流れをお話ししたいと思います。会は夏冬年二回開催され、私が参加した会の詩題は「港」でした。事前にエクセルの乱数関数で割り振られた課題韻字を句末に持つ七言一句を投句します。韻字に当たり外れがあっても、それも勉強、天の采配を楽しみましょうという会です。私には庚韻の「榮」と「明」がやって来ました。正直ホッとしましたが、三日後には投句しなければなりません。私は締め切りギリギリに送り、その日の夜には参加者の名前が伏せられた投句の一覧が開示されます。知らない詩語や難しい韻字に感心しながら、良いと思った句を選び人気投票をします。当日は順番に自作について簡単な説明を行い先生から講評をいただきます。怒られたりしませんから安心して下さい。そして最後に先生から優句、秀句、世話役から人気句の発表が行われ、横浜港の景色を背景に連句が画面に表示されました。優句として私の名前が呼ばれた時は本当に驚きました。

私は吟行会で句作りの大切さを学びました。一首を纏める事に汲々とするより、見所のある七言、強い一句を作りたい、篇あって句なしではなく、句あって篇なしでも初心者には十分ではないかと思えました。

令和五年度 研修会

令和五年度の研修会は暮れも押し詰まる十二月二十日、神奈川近代文学館で開催されました。コロナの余波で前年は四月に開催された為やや間があきましたが、当年度は当初計画通りの十二月開催で、今後は暮れの風物詩にしたいという会長の感想もありました。

全部で十六首の投稿があり、投稿者の顔触れも平成十八年に漢詩連盟が発足したと同時に入会の大ベテランから、当年の入門講座を受けてサークル結成に参加したばかりの、いなき会(十七期)メンバーまで、ほぼ切れ目なく老・壮・青が並びました。

会の運営は作者を伏せて配布された全ての投稿詩の中から、推薦詩を投票し合い優劣を競うと同時に、その結果を伏せたまま、自由に感想、疑問、自分なりの解釈などを披瀝し合うという従来通りの方式がとられました。

コメントターの住田先生・水城先生を含む十五名で熱心な議論が交わされました。投票結果による表彰詩は、下記のとおりです。それぞれ、賞品が渡されました。終了後は、有志の参加による懇親会で盛り上がりました。

(白石信隆)

優秀賞

廃田秋景

日暮廃田啼亂鴉

敗渠無水使人嗟

西風滿地草蕭瑟

只見叢叢石蒜花

九詩期会 岡嶋宣昭

廢田秋景

日暮の廢田 乱鴉啼き

敗渠水無く人をして嗟か使む

西風地に満ち草蕭瑟たり

只だ見る叢々たる石蒜の花

優良賞

七十初書法

老夫七秩莫逡巡

心靜臨書滌硯塵

染翰敢然拈不律

爭知墨撥點衣巾

志詩会 木村 孝

七十にして初めての書法

老夫七秩逡巡すること莫れ

心静かに書に臨み硯塵を滌う

翰を染め敢然と不律を拈る

争でか知らん墨撥ねて衣巾に点するを

優良賞

江村偶作

江村秋盡稍寒生

盪漾蒼波一望清

日暮孤舟回棹去

兩三漁戶四無聲

五友詩林会 大野若人

江村偶作

江村秋尽き 稍寒生ず

盪漾 蒼波 一望清し

日暮れ孤舟棹を回らせ去る

両三の漁戸 四に声無し

特別賞

海上流雲

曲浦潮聲去不休

青松謾謾足消憂

白雲曳曳到何處

應是越瀛為玉樓

既望会 内山早奈江

海上の流雲

曲浦の潮声去りて休まず

青松謾謾憂を消すに足る

白雲曳曳何処に到らん

応に是れ瀛を越え玉樓と為らん

表現方法の学び

五友詩林会 大野若人

令和五年十二月の漢詩研修会にはじめて参加しました。

事前に参加者の漢詩を拝見しました。漢和辞典、神辞会詩語集、搜韻などを参考に、詩語の意味、情景、詩情を理解することにしました。

自由題となっていたので、各々違う題の下で、情景や詩情の表現の仕方も異なるため、評価点を付けるのは難しいところがありました。

研修会では、質問や意見をぶつけ合うことにより、詩語の意味や工夫がようやく分かってきました。人によって、異なる解釈があることも興味深いところです。

私の詩は、題「江村偶作」で、先生はじめ参加者の方々から、有益なご指摘を頂きました。初心者の時に、起承転結が分からず苦労したので、情景の展開に注意して作詩しました。結句を両三漁戸四無聲とし、数字を並べながら晩秋の静かな様子を描けたかと思えます。

最近では詩語の選択が重要と感じ、ほかに適切な詩語がないか、よく探すようにしています。図らずも賞を頂きましたが、いろいろな角度から推敲する必要性を学んだので、精進したいと思います。

神奈川県漢詩連盟 2023(令和5)年度 サークル活動状況(2023.4~2024.3)

区分、開始年	サークル名	会員数	代表者	指導者	開催日	主な会場	特記事項
2007年(H19)・1期 2018年(H30)・12期	金星干支会	8	五嶋美代子	三村公二 新井治仁	奇数月 第2火	かながわ県民センター	一昨年から金星干支会として活動。題詠と自由題のどちらかで作詩。
2008年(H20)・2期 2013年(H25)・7期 2014年(H26)・8期	三七八会	14	橋本孝一	中島龍一	奇数月 第3水	男女共同参画センター横浜南、 技能文化会館	詩稿提出は兼題・自由題で二つまで。詩稿提出にかかわらず出席可。
2009年(H21)・3期	好文会	7	高津有二	玉井幸久	偶数月 第3木	すべてZOOM	8月を除く偶数月で全5回、 全てZOOM。
2010年(H22)・4期	詩游会	5	新井治仁	なし	偶数月 第3火	神奈川県立公文書館	通年対面で実施。2月から開催の以文会との合同例会を今後も継続。
2011年(H23)・5期 2017年(H29)・11期	五友詩林会	11	白石信隆	住田笛雄	偶数月 第2木	かながわ県民センター	定例会8月を除く5回、全て対面。
2012年(H24)・6期	以文会	9	大森冽子	なし	偶数月 第3火	県立公文書館	2024年からは4期の詩游会と合同勉強会、指導者なしで会員の互評。
2012年(H24)・ 岳精会	岳精会漢詩 研究会	7	家吉幸二	三村公二	偶数月 第2水	岳精流日本吟院総本部 (川崎市川崎区)	例会時に兼題を頂き、次回定例日に作詩を解説を加えて質疑応答。
2015年(H27)・9期	九詩期会	13	山口幸雄	水城まゆみ 高橋純子	奇数月 第2木	八洲学園大学(高島町)	講師交代で詩稿提出を紙から電子データに。3月松田町福昌院で吟行会。
2016年(H28)・ 千代田岳精会	千代田岳精会 漢詩研究部	9	田川行雄	香取和之	偶数月 第2水	MMフォレシス内サロン (みなとみらい)	前講師逝去に伴い、今後は香取先生のご指導で力強く運営していく。
2016年(H28)・10期	十期会	9	高田宗治	高津有二	奇数月 第3木	横浜市戸塚公会堂ほか	定例会提出詩は自由詩。3月は自由詩と「港にかかわるもの」提出。
2019年(R1)・13期	令和会	9	竹村文孝	松井秀人	奇数月 第1火	横浜市西区福祉活動拠点 「フクシア」	対面5回、ZOOM1回。1月から詩稿提出方法を郵送からメールに変更。
2020年(R2)・14期	志詩会	7	東島正樹	香取和之 牛山知彦	偶数月 第3月	なか区民活動センター	例会6回開催、約3時間批評を受け、相互感想を述べ合っている。
2021年(R3)・15期	逸語会	10	田内 隆	水城まゆみ 高田宗治	奇数月 第1火	かながわ県民センター	定例会開催6回、全て対面で実施。
2022年(R4)・16期	既望会	9	内山早奈江	高津有二 白石信隆	偶数月 第2火	神奈川近代文学館	定例会はすべて対面にて開催。
2023年(R5)・17期	いななき会	9	吉池 純	新井治仁 東島正樹	奇数月 第3木	かながわ県民センター	2023年9月発足。例会4回開催。偶数月は自主勉強会を実施。
計	15サークル	136			奇数月7, 偶数月8		

注1：5期五友会と11期詩林会は合併して2023年4月より「五友詩林会」となった。

注2：三水七歩会と8期八起会が2023年11月より「三七八会(みなわかい)」となった。

漢詩鑑賞会一覧

名称	講師	曜日・時間	会場	世話人	概要
鑑賞会A	三村公二、中島龍一、 玉井幸久	第4木 13:30-15:45	ZOOM	白石信隆 045-893-6883	宋詩鑑賞・漢詩の周辺・四季の漢詩
鑑賞会B	住田笛雄、水城まゆみ	第4金 13:30-16:00	ZOOM	高田宗治 090-1841-6764	聯珠詩格の鑑賞と詩作
鑑賞会C	中島龍一、新井治仁、 香取和之、高津有二	第4火 13:30-16:00	ZOOM又は、 かながわ労働プラザ	新井治仁 045-432-5438	御定佩文齋詠物詩選の七言絶句の鑑賞
霧笛女子会	古田光子、水城まゆみ、 横溝比呂美、大森冽子	偶数月、第1火 13:00-15:00	かながわ県民センター	水城まゆみ 0463-87-2657	各講師の講義

サークル紹介

さまよえるサークル

以文会代表 大森冽子

はじまり

二〇一二年入門講座三十九名、歩留り十五名で論語「君子は文を以て友と会し友を以て仁を輔く」から以文会を立ち上げる。

勢いあまつて

強力リーダーの下、結成三年目にして詩集を発行。市民サポートセンターの施設を使い総力で手作り。しかも国会図書館にも登録。

時の流れにさからえず

幾多の減員があり常時八・九名だったのが、石川町での対面例会に出席困難者もあり、二〇二二年には四・五名までに減少。会員も七〇代から九〇代となり、宜なるかな。

かくして

二〇二三年桜庭先生のご逝去により、会議の結果以文会解散やむなしの結論に達す。同時に今後の対策として、全員一括で講師のいらつしやるサークルとの合併を模索する。

すったもんだ

交渉が実を結び詩遊会との合併にこぎ着ける。会名をどうするかは双方の思惑もあり、はつきりとは決まらないまま初回の例会を迎えることになる。そこで住田先生の以文会の名は残したままで合同勉強会ではないのではな

いかの一声で進行決定。

あつというまに

合同例会二回にして、住田先生のリタイアを受け、互評での例会となる。以文会では互評が常で、詩遊会では更に活発な互評が行われていた。四期六期は年齢も似通っていて二回目にして違和感なく意見交換することができた。ハッピーなマリァージュといえる。他サークルの講師を務める三名を筆頭に新たなサークルの誕生の第一歩となる。以文会の今後については課題が残る。

九詩期会のこれまでと現況

九詩期会代表 山口幸雄

二〇一五(平成二七)年の第九期の入門講座は参加者が五十一人とこれまで最多で、サークル結成も二十四人というにぎやかなスタートでした。

漢詩という「奇しき」縁から生まれた会として「九詩期会(くしきかい)」と命名し、古田先生と大谷先生にご指導いただきました。大人数だったので、教室の前と後ろの二グループに分かれてお話をうかがうという不規則なかたちをとったこともあり、先生方は大変だったことと思います。

結成三年目には例会後の飲み会から「江南漢詩ツアー」の企画が生まれ、既製のパックスツアーではなく、手作りで上海・蘇州などのツアーを実施しました。帰りの飛行機が台風で欠航となり、急遽木賃宿のようなホテルに泊

まったことは今でも語り草となっています。

また会員の平賀さんがご住職をされている松田町の福昌院でお茶会や坐禅のある吟行会を開催したり、結成五周年記念の『九詩期会詩集』を刊行したり、例会以外の活動で、元気な会だと言われることもありました。

しかしコロナのおかげで、おとなしくせざるをえず、そのうちに少しずつ会員の高齢化も進んで、結成九年目の現在では、会員数は十三人となっています。

また大谷先生は川上先生と交代、川上先生が退かれた後、お一人でご指導いただいた古田先生も昨年退かれて、現在は水城先生、高橋先生のお二人にご指導いただいています。

コロナも落ち着いてきたので、また少しずつ活動をと考え、今年三月には前述の松田町の福昌院で、二回目の吟行会を開催しました。写真はそのときの様子です。



九詩期会 柏梁体を作る

会員の声

「先生、あるいて来ました」

三七八会 柴本信子

「中国の詩を読むと気が滅入ってしまう。老人を鼓舞する詩はないのですか?」という読者の問いに、石川岳堂先生は「老人が澆刺としている時代には、元氣な老人のための詩を探して紹介しなければなりませんね」

*プレジデント社「漢詩」のこころ

「先生 あるいて来ました」は岳精会・横山精真宗家の吟行記にして人生オマージュである。横浜市鶴見のご自宅から北九州市八幡の恩師宅までお仲間と共に大踏破。私の故郷有松・鳴海に隣接する桶狭間古戦場、今川義元本陣跡の高徳院でも高吟されておられる。

桶狭間戦 横山精真

激雨黒雲呼鬼神 喊聲和霽白兵頻
英雄奇策無疎漏 猛進三千銳氣振

娘時代、高徳院で私は、文人小出玉心斎師の下、茶華道入門者指南をしていた。有松・鳴海は絞り染めの産地であり、町並みは日本遺産である。芭蕉や頼山陽などの揮毫品が大店宅に伝えられている。若き日の服部擔風先生は弥富から週に一度、五里の道程を歩いて鳴海の漢詩人、高嶋箆川氏に学んだ。榊原邦彦氏編纂の鳴海土風記に詳しい。

今夏こそは亡き父母と兄の墓前で父の好きだった黒管一曲「エデンの東」と私の拙詩を献じたい。

憧れの杜牧先生

十期会 長谷川昇

唐宋を主とした詩を多く読みました。この中で、私の好きな詩人は晩唐に活躍した杜牧です。杜牧は私達が学んでいる七言絶句を多く残しています。文章がとても上手で、なおかつ、素人の私にもわかりやすい詩が多いと思います。詩文のセンスの良さ、自分自身を素直に表わしてるところが、特に好きです。

これから、句ごとに、その特徴を明確に表現していると思われる記述を書きます。

色彩的表現の美しい句・霜葉紅於二月花
「山行」千里鶯啼綠映紅「江南春」似火山榴映小山「山石榴」。センスの良い句・落花猶似墜樓人「金谷園」青山隱隱水遙遙「寄揚州韓綽判官」。作者自身を素直に表現している句・十載青春不負公「題禪院」自恨尋芳到已遲「嘆花」占得青樓薄倖名「遣懷」。名詞を並べイメージをかもし出している句・水村山郭酒旗風「江南春」銀（紅）燭秋光冷畫屏「秋夕」深秋簾幕千家雨、落日樓台一笛風「題宣州開元寺水閣」。深いあじわいのある句・多情却似総無情「贈別」誰為駐東流、年年長在手「惜春」。

このように五十年の生涯の中で、活き活きとした美しい詩を描きました。書ききれなかった句が、まだ多くあります。盛唐の華やかな時代が過ぎ、唐王朝の翳りを受け、その風潮の中で、輝かしい作品群を残した杜牧は、詩人として卓越していました。

「漢詩」の奥深さについて

志詩会 河野真一

ふと立ち寄ったなか区民活動センターでの掲示チラシを見たのが、神奈川県漢詩連盟に加入するきっかけとなりました。高校時代から古典で「漢文」の授業は結構好きで、中国には興味がありました。大学時代には北京に留学し、仕事でも三年間上海に駐在しました。まだダムができる前に漢詩に出てくる「三峡」にも武漢から重慶まで船で遡上し、その景色の雄大さと急流ぶりを実感しました。また成都では「杜甫草堂」にも足を運びました。

初級講座を受講した後、グループをつくって、講師のもと隔月で漢詩づくりに取り組んでいます。出されたテーマをもとに作るのですが、自分では出来たつもりが、いつも先生から修正のオンパレードです。単なる事実や風景の描写ではなく、七言絶句の中に、作者の感動や思い入れが込められていないと詩にならないこと。また押韻があるため、使用できる漢語を見つけないに苦戦しています。

グループのメンバーには優秀な方が多数おられ、自分とのレベルにどんどん差がつき、ちよつと落ち込んでいます。でも「愚公移山」の精神で、これからも漢詩の作成に取り組んでいきたいと考えています。これからもよろしくお願ひします。

漢詩と私

飯島敏雄

高校一年の時に姉が残した古文の教科書に何故か興味を持ち読み漁っていたので授業の時間に質問をすることが多かった。清少納言の枕草子の中で「香炉峰の雪は簾をかかげて見る」ということは姉の古文の教科書で読んで知っていたが、「香炉峰雪」の原詩が白居易翁作の漢詩の故事からきているということは知らなかった。古文と漢文の授業担当の鏡淵正義先生は私が古文の授業でよく質問することから私が漢文にも興味がありそうだと思われたようであった。大学で漢文を深く研究されてきた先生は特別に私を自宅に招いて漢文と漢詩の話(講義)をいろいろしてくださった。

先生は漢文でも特に陶淵明翁を深く研究してこられたそうで私に帰去来辞や五柳先生伝、および李白や白居易の漢詩を詳しく教えて下さった。

漢詩については李白翁。白居易翁の詩を解説して下さい。その時習って印象の深かった陶淵明翁の詩の一つを次に示す。

飲酒二十首其五飲酒 陶潜・陶淵明
 結廬在人境 廬を結んで人境に在り
 而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し
 問君何能爾 君に問ふ何ぞ能く爾るやと

心遠地自偏 心遠ければ自ずから偏なり
 採菊東籬下 菊を採る東籬の下
 悠然見南山 悠然として南山を見る
 山氣日夕佳 山氣 日夕に佳く
 飛鳥相與還 飛鳥 相與に還る
 此中有真意 此の中に真意有り
 欲辨已忘言 弁せんと欲して已に言を忘る。

この時習った漢文と漢詩が「漢詩と私」の出遭いであった。

工業高校卒業後、私はその後いろいろな人の支援や導きを受けて短大、大学、大学院まで進むことができた。勉学の専門は機械工学であるが、他方漢文の独習にも同じくらい時を費やしていた。大学院生の五年間は一戸建ち下宿の周りには田に水を引くための細い水路が有ったのでそれに沿って五本の柳を植えて五柳先生を氣取っていた。

その後大学の工学部に就職した私は機械工学の演習という講義を担当したが配布する演習のプリントの下の三分の一には論語や孟子など四書五経、李白、白居易の詩を載せて大学の建学の精神である文理融合人物の育成に役立つと思いいこのスタイルで授業を行った。

四十年の教員生活もあつという間に過ぎた年の正月に神漢連の元理事の川上修己さんから「漢詩の初心者入門講座開催案内」と自作の詩の入った年賀状をいただいた。振り返ればこれまでは昔の有名な詩を鑑賞するだけで作ることをしたことがな

く、また高校卒業後は先生について漢詩の授業を受けたことがなく、論語にあった「学而不思則罔、思而不学則殆」を思い起こして第五回の「初心者入門講座」に応募した。平仄や詩語など自習だけではあまりよく理解できなかったことが会長や役員の方々の指導と教科書「だれ漢」のお陰でまさに目から鱗が落ちる思いで学ばせていただいた。

約二十名強の同窓生の中の十二名で漢詩勉強サークル五友会が結成され、隔月の木曜日故田原健一副会長と執行役員の高津有二様の指導で起承転結の組み立て方や新たな詩語の知識が増えた。二年後の神漢連の総会が開催された折にサークル間で漢詩大会、「漢詩バトル甲子園」が行われ、優秀賞として奇しくも私の名前が呼ばれ、審査委員長の窪寺啓先生から祝福の言葉をいただいた。僭越ながらその詩は次の通りである。

秋夜偶成

飯島敏雄

夜闌輾轉睡難成 夜闌輾轉睡成り難し
 牀下孤蜚切切鳴 牀下の孤蜚切切鳴く
 肘枕暫時懷往事 肘を枕にし暫時往事を懐う
 西風似到舊朋聲 西風到るが似し旧朋の声

この朗報も初心者入門講座や田原先生のご指導のお陰と感謝している。その後神漢連のホームページ立ち上げの手伝いなどをし、八秩を過ぎた今日は私の趣味である囲碁の漢詩を作りながらその棋の道に入って愉しみたいと夢見ている。

漢詩大会で 神漢連会員活躍

令和五年度『扶桑風韻』漢詩大会

優秀賞

秋宿山家

秋山家に宿る

五嶋美代子

秋蟬向晩送寒聲

秋蟬晩に向いて寒声を送る

翠嶂參差四面横

翠嶂參差として四面に横たわる

乍雨乍晴林變相

乍ち雨ふり乍ち晴れ林相を變ず

獨身止宿看雲行

獨身止宿して雲の行くを見る

瀨祭

作詩を始めて六年が過ぎた。最初は太刀掛重男著「だれにもできる漢詩の作り方」一冊で作詩をした。少し経つと金星十支会の先生が河井醉萩編「詩語辞典」を紹介してくれた。

これに一昨年からは石川忠久監修「漢詩創作のための詩語集」が加わった。これだけでも大変な進歩だったのに神辞会に顔を出したら、パソコンで「搜韻」や「神辞会詩語集」からも詩語を探せるようになった。この頃は文法の大切さを感じるようになり、古本で手に

入れた多久弘一・瀬戸口武夫「漢文解釈辞典」を必ず開くようになった。大漢和辞典も古本で手に入れた。これと神辞会の「大漢和漢語大詞典掲載語目次検索」を合わせるともつと詩語が見つけれられるようになった。作詩をする時はいつも「瀨祭」である。

自身のささやかな人生の手箱の中からさらにと光る粒を拾い上げ、それを七言絶句にまとめていく。まとめるというからには四句が一つのテーマで有機的につながるように仕上げていく。そのために文法や典故・詩語を求めて、ひたすら捕った魚を並べる瀨になつていく。

今回受賞した「秋宿山家」は台風の近づくある日、山中に泊まった経験をもとに作詩したものである。風景描写の中に、生きることの頼りなさや移ろい易さを読み取っていただけたなら幸いである。

秀作

雲上雲下

雲上雲下

大谷明史

涔涔積雨溢禾田

涔涔たる積雨 禾田に溢れ

道路水流成一川

道路水流れて一川を成す

雲下誰思雲表景

雲下誰か思わん 雲表の景を

火輪赫赫在青天

火輪赫赫として青天に在り

佳作

秋雲

秋雲

小嶋明紀子

獨倚吟筇對碧天

獨り吟筇に倚りて碧天に対す

湖光不動轉悠然

湖光不動 轉た悠然

商風忽地從山嶺

商風忽地 山嶺從りす

吹散纖雲幾百千

吹きて纖雲を散ずること幾百千

入選

海上流雲

海上の流雲

内山早奈江

曲浦潮聲去不休

曲浦潮声 去りて休まず

青松謾謾憂足消憂

青松、謾謾 憂いを消すに足る

白雲曳曳到何處

白雲 曳曳何れの処にか到らん

應是越瀛爲玉樓

應に是れ瀛を越えて玉樓と為らん

池上卽事

池上卽事

高橋純子

秋池清淺浸青天

秋池 清淺にして青天を浸す

水鳥飛來生細漣

水鳥 飛び來たりて細漣を生ず

雲影忽披還聚處

雲影 忽ち披き 還た聚る處

松陰微響一殘蟬

松陰 微に響く 一殘蟬

中秋無月

中秋無月

松本祐輔

良宵欲賞上高樓

良宵 賞せんと欲して 高樓に上る

豈料陰雲漠漠留

豈に料らんや陰雲 漠漠として留まるを

空仰中天頻嘆息

空しく中天を仰ぎて 頻に嘆息す

如今何處月華浮

如今何れの処にか月華 浮かぶ

第二十六回全国ふるさと漢詩コンテスト

入選

宿曲江畔

曲江の畔に宿る

中山洋子

急雨欲來風滿林

急雨 来たらんと欲し 風林に満つ

横波忽走岸頭侵

横波 忽ち走り 岸頭侵す

荒村盡日無人影

荒村 尽日 人影無し

曳杖老翁孤立吟

杖を曳く 老翁 独り立ちて吟ず

夜投山館

夜に山館に投ず

小嶋明紀子

身著征衣經幾年

身に征衣を著けて 幾年をか経たる

逍遙百里到雲邊

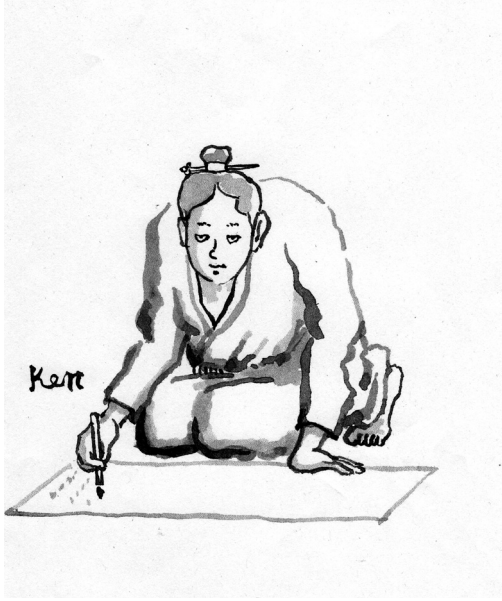
逍遙 百里 雲辺に到る

破窓纔作四更夢

破窓 纔かに作す 四更の夢

三五清光照獨眠

三五の清光 独眠を照らす



神奈川県漢詩連盟の会員証ができました

最近では、神漢連の活動が、ホームページで提供されることが多くなりました。また、ホームページの中でも会員に限定した専用の情報も増えてきています。

そこで、インターネットを利用しての会員が、アクセスしやすいような情報を書き込んだ「会員証」を新しく作りしました。

問合せ先、ホームページのURL、神辞会・神漢連図書館の会員専用ページのパスワード、神漢連規約のURLが分かるようになっていきます。名刺サイズで、財布や手帳に入れて手軽に持ち歩けます。

今回の会報発送に同封してありますので、自分の名前を書きこんで、ご利用ください。

■ 神奈川県漢詩連盟の会員 俣野長生氏は令和五年十二月十四日に逝去されました。(享年八十八)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

■ 神奈川県漢詩連盟の会員 保田昌男氏は令和五年十二月二十日に逝去されました。(享年八十八)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

第六回「漢詩作指導者養成研修会」報告

十期会 高田宗治

□ 講師 後藤淳一先生

日程 令和六年三月二十二日、二十三日
会場 学士会館(東京・千代田区)

参加者 十二名神漢連からは高橋、高田

□ 第一日

一、「漢詩の歴史」古体詩や近体詩から始まって漢字の四声、平仄他、仏典の翻訳から二字熟語誕生まで詳しく解説。

二、「漢詩の規則」二四不同二六対の原則、禁忌事項等々の解説。特に強調されたのは、和習和語は絶対避けるべしと。搜韻の活用が重要と認識する。

三、「作詩の要点」詩の中で最も大事な部分は結句下三字。ここが輝かないと見る気はしない。結句と転句を重視すべしと。

□ 第二日

一、「漢文基本構文」英文法の基本パターンにならうと。基本構文の組立てパターンの解説。各種パターンの語順の説明。

二、「訓読の活用法」漢文訓読に用いる文語活用表に基づき各種読み方についての解説。六種パターンの文語活用形の説明があった。

三、「詠題詩の提出」題は帝城春色と江上樓臺。いずれか一首。先生の批正、討論。優れた作品が多く、良い経験をした。二日間は短かったが、よい勉強になった。機会があればまた参加してみたい。

神奈川県漢詩連盟 令和六年の行事予定

カレンダーに予定を記入しましょう

● 全日本漢詩大会神奈川大会(詳細は二頁参照)

漢詩大会

期日・時間 令和六年十月二十六日(土)午後一時三十分～四時三十分
 場所 はまぎんホール ヴィアマール(JR桜木町駅前)
 内容 一.表彰 二.記念講演 鷺野正明先生「蘇州の歴史と漢詩」
 三.構成吟「神奈川を詠う」

交流懇親会

同日午後五時三十分～七時三十分 横浜中華街

吟行会

翌二十七日(日)午前十時三十分～午後二時三十分
 三溪園(横浜市中区本牧)

● 「自詠自書入門講座」開催

第一回 八月十一日(日)午後一時三十分～五時
 第二回 八月十七日(土)午後一時三十分～四時
 場所 横浜市社会福祉センター・会議室
 参加資格は、神漢連会員で作品展未出品の方。

● オンライン吟行会

期日 八月二十二日(木) 午後一時三十分～
 開催日が近づいた頃メールアドレス保有者全員に参加可否の問合せをします。

● 研修会

期日 十二月十八日(水) 午後一時～四時
 場所 かながわ労働プラザ
 (予備日 十二月二十五日(水)時間・場所同じ)

編集後記

今号から、会報編集に伊藤邦彦が加わり、高橋純子、東島正樹の三名体制となりました。よろしくお願いいたします。

この会報については、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」の内の、漢詩で遊ぶ部分が少ないというご指摘を受けました。次号以降どうやって遊ぶのかなども考えていきたいと思っていますので、皆さまも考えを聞かせていただけたら幸いです。

今年の神漢連は、全日本漢詩大会神奈川大会へ向けて企画、計画等に力を傾注することとなりました。実は昨年の夏に開催が決まっていた、準備を開始して以来、ずいぶん先の話だと思っていました。今やすぐ目の前のことになりました。たくさんの方が「港にかかわるもの」を題とした詩を応募されましたが、十月二十六日の大会には大勢の方が来場されますようお願いしております。講演会、翌日の吟行会など行事の内容は本文中に詳細に記してあります。

今年も漢詩入門講座が開かれて、二十数名が神漢連に入会されました。コロナが明けて外に出て学ぶということが、また日常になってきたと思います。受講者四十名弱も久しぶりのこと、漢詩も捨てたものではないなと思ったりしました。新しいメンバーを迎えて、神漢連もこの会報も充実したものとなるようにしていきたいものです。

(東島正樹)